

## 明治後期の文学的国づくり：国民新聞に詠まれた御歌所歌人の和歌

カルブネ マリア

御歌所は、1869年に宮内庁に設置され、明治維新の政治神話を正当化するために、奈良時代の宮廷の威信を模倣し、復活させようとする明治時代の機関の潮流の一部であった。この局は、国学や神道学の学者を中心に構成され、明治時代の国家建設に参加した。皇族や公家の歌の校訂や批評に加え、御歌所の活動の中で最も長く続いたのは、新年の歌会始を再興したことである。発表では、1904年以降の文学的・政治的論評の、あまり確立されていない形式、すなわち国民新聞紙上での御歌所の歌人たちによる和歌の発表に注目する。御歌所長である高崎正風をはじめ、千葉種明、大口鯛治、坂正臣などのメンバーは、国際的な出来事や国内の出来事について定期的に短歌を詠んだ。その他、明治天皇の軍事教練への参加、靖国神社への参拝、戦時中の軍艦進水、アメリカのウィリアム・ハワード・タフト陸軍長官の訪問、伊藤博文の暗殺など、重要な政治的出来事が文学的な解説で彩られてきた。国民新聞が明治末期政府と緊密な関係を築き、「御用新聞」という悪意ある蔑称を得るに至った背景を考えると、こうした短歌の出版は、お達者会員による特定可能なコラムに、時折、武将や国家外交官の歌を添えて出版されたものであり、政府の文学的代弁者と見るべきであると思う。国民的アイデンティティの形成において、全国紙のような印刷メディアが利用されたことは、既存の研究によって十分に証明された。明治末期の『国民新聞』の紙面では、国民意識が再確認され、皇室賛歌から民衆の苦境への共感的な聞き手まで、さまざまな性質を持つ短歌による社会的又は文学的解説を通じて、政府の監視の目が表現された。

## 明治後期の文学的国づくり：国民新聞に詠まれた御歌所歌人の和歌

ハイデルベルク大学 カルブネ マリア

本稿は「御歌所」という明治時代の歌人派に着目し、彼らの活動の実態を明らかにすると共に、彼らの活動がナショナル・アイデンティティの形成にどのような影響を与えたのかを解明することを目指します。分析対象としては、国民新聞や国学院雑誌で彼らが発表した、和歌や新体詩を取り上げます。

御歌所は 1869 年に、宮内省内に再設置された組織で、御製や皇族の御歌、より一般的には、伝統的な和歌を中心に扱っていました。御歌所の再設置は、奈良時代の宮廷の威信を模倣し、復活させようとする、明治時代に行われた諸制度改定の一環でした。明治政府は、奈良時代の宮廷の構造だけでなく、儀式や機能も模倣することで、明治維新は政権転覆ではなく、王政復古であるという政治的神話を正当化しようとしたのです。松沢俊二氏によると、御歌所の主要な目的のひとつは、和歌とナショナル・アイデンティティの結びつきを確立することでした。歌会始、歌集の編纂、貴族の歌詠みに対する文芸批評といった活動だけでなく、新聞や教科書などに御製を掲載することで、皇室イメージを保護する役割も果たしました。また、天長節や紀元節など、国家の祝日や政治的儀礼を執り行う際にも歌を詠みました。

御歌所の歌人たちは国学、儒学、神道などさまざまな素養を持った人々でした。江戸時代の国学者かつ歌人である香川景樹の桂園派の流れを汲むとされ、古今和歌集を中心に、御歌所長である高崎正風の歌論観の影響を受けたと言われています。しかしながら小泉菱三氏によると、御歌所の歌人が一派を形成するだけの表現様式を持っていたかどうかは疑わしく、宮廷の御歌所を中心として集合した漠然たる存在にすぎないのでは、という見方もあります。明治時代に「御歌所」として名を馳せた著名なメンバーは高崎正風、千葉種明、小出榮、坂正臣、井上通泰などでした。高崎正風は、明治天皇の和歌の師を務め、明治天皇の歌観に大きな影響を与え、御製の扱うことができた稀有な・唯一無二の人物でした。改めて指摘するまでもありませんが、研究者たちは長い間、歌壇を代表する「旧派」と、正岡子規や与謝野鉄幹らに代表される「新派」の対立を指摘しています。

御歌所の和歌出版活動の複雑さは、次の 3 点にまとめられます。第一に、歌人たちは、歌会始での発表から新聞や文芸誌への投稿まで、さまざまな目的で自ら和歌を詠みました。第二に、庶民が和歌を詠むことを奨励し、和歌作りを国民的アイデンティティの象徴にしようとした。第三に、そしておそらく最も重要なことは、1904 年以降、高崎が明治天皇の御製を本人の許可なく全国紙に掲載させたことです。これらの御製は、明治天皇の名声を高め、徳の高い君主、歌聖としての評判を確立したと言われています。御歌所が 1874 年に始めた全国規模の歌会始は、今まで述べてきた御歌所の和歌の普及とその国づくりでの役割を最もよく統合する行事だと言えるでしょう。なお、歌会始の発展は、御歌所継続の遺産の一つであると思われます。

歌会始の歴史は 13 世紀中頃まで遡ります。明治時代において歌会始を催すことは、1869 年に当時まだ若年だった明治天皇の望みによって始まりました。1872 年からは

宮中で働いた判任官、1874 年以降は身分、年齢、性別に関係なく、すべての日本臣民が参加できるようになりました。このように、政治的・文学的儀礼としての歌会始は、（ホブズボームの言葉を借りれば）19 世紀に「つくられた伝統」と見ることもできるでしょう。言い換えれば、国民意識を高め、明治天皇と日本国民との架け橋となることを意図したものだだったのです。宮内省への投稿された詠歌数は、明治期を通じて 3,000 首から 30,000 首近くまで、10 倍も増加しました。

明治時代、御歌所には 1903 年から 1908 年まで『歌』、1908 年から 1923 年まで『わか竹』という二つの文芸誌がありました。今日まで保存されている「初学有志の指針」、「歌道の指針たる冊子」を編集方針とする機関誌『わか竹』も 1908 以降、毎月発刊しています。宮本誉士によれば、これらの機関誌には、当時を代表する「旧派」側の歌人もしくは学者たちの歌論をはじめ、近世期の国学者の事績や研究資料なども紹介されており、学統意識の高さが垣間見えるということです。また、長福香菜氏によると、新派歌壇との論争が起こった後も、彼らは様々な文芸誌に和歌を発表しており、1897 年に正岡子規や与謝野鉄幹に代表される新派の詩人たちが御歌所の歌人たちを激しく攻撃した後も、それらの出版物は減少することなく、その存在感を示しています。歌会始と同様、1880 年代までの御歌所員は保守的で、日本の伝統的な美意識を踏襲し、伝統的な歌題を詠んでいました。

しかし、1880 年代以降、彼らの歌のいくつかは非常に愛国的なものとなり、明治時代の国家イデオロギーの中核をなす政治的神話を伝え、強化したとさえ言えるでしょう。つまり、天皇は天照大神の子孫であり、国の安泰を祈る神々との媒介者であるという考え方であり、日本を神国として他国よりも高く評価するものでした。例えば、明治 30 年（1897 年）の『國學院雑誌』第三卷第三号に掲載された、英照皇太后の逝去に際しての坂正臣の「天孫光臨の歌」という新体詩を考えてみましょう。新体詩は当時、唱歌や軍歌のような形で、国家主義的な理想を伝えるためにも使われていたことはよく知られています。この詩は後に、1898 年に出版された新体詩集『月の柱』に、他の歌人や与謝野鉄幹ら新派歌人の詩とともに掲載されています。第一章を読めば：「天の下清まりぬわが皇孫 / 行きてしろしめす天之日嗣を / その隆えまさんことは天地と共に窮無かるべしと / たからの御鏡をとりてかたみとして授け給ひぬ / 嗚呼天祖の御詞鏡に映る影のごとく今にいたりて眞さやかに仰ぐ一系の君」となります。

これまで挙げた出版媒体に加えて、注目したいのは、国民新聞に掲載された御歌所の歌人たちの和歌と明治天皇の御製です。徳富蘇峰率いるこの新聞は、当初はリベラルで民主的な新聞でしたが、日清戦争後の三国干渉で保守化し、政府との結びつきを強め、やがて「御用新聞」と呼ばれるようになりました。御歌所派も新たな方向性を打ち出したのは、1904 年から 1905 年にかけての日露戦争でした。高崎正風は、天皇の御製が国民の道徳に大いに役立つと考え、政府要人の協力を得て新聞に漏れたと思われています。1904 年 11 月 7 日、明治天皇の有名な「四方の海」という和歌がこうして発表され、この歌は後に、明治天皇の平和主義を象徴していると解釈されるようになりました。このエピソードはよく知られたものかと思いますので、この後の御製の掲載に注目していきたいと思います。

日露終戦に伴い、御歌所長・高崎正風は、1 月 1 日、2 月 11 日（紀元節）、4 月 3 日（神武天皇祭）、11 月 3 日（天長節）など、象徴的な日付を選んで御製を国民新聞

に掲載させました。1906年3月10日と5月27日の奉天戦終結と対馬戦終結記念日、1906年5月3日の靖国神社臨時大祭執行、1909年11月9日の陸軍大演習などにも御製は国民新聞で発表されました。1904年以降、他紙でも御製が掲載されるようになりましたが、私が調査した限りでは、1906年以降の御製は、巻頭の中央の装飾的な表示や、象徴的で政治性の高い日付が選ばれるなど、国民新聞特有のものでした。この時代の御製に共通する特徴として、国の安泰を祈る歌、国を守る御製、民衆の心を一つにする御製、神や軍隊を詠む御製が多いことが挙げられます。ここでは、先行研究にてあまり注目されてこなかった、以下の御製を考えてみたいと思います。

1905年11月15日、皇室の参拝に際して発表された御製、『定まりしその/はじめより葦原の/國の栄えは/神ぞもるらむ』と日露終戦から2年後の1907年11月14日に発表された御製『勝鬨の/響くにつけて/むら肝の/心たゆむな/わが軍人』と1907年4月3日の神武天皇祭に掲載された御製は『伝へ来て/国の宝と/なりにけり/ひじりの御代の/詔みことのりぶみ』でした。最後に、明治天皇が、天照大神の天孫であるという『万世一系』論に連なる神話を強調する次のような御製が、紀元節に数多く発表されています。例えば、1907年2月11日に掲載された御製は『うけつぎし国の柱の動きなくさかえ行く世を猶祈るかな』でした。

開戦後、御製とは別に、御歌所の歌人たち自身の短歌欄ともいべきものが、ほぼ毎日、あるいは2、3日おきに設けられ、戦況や兵士の士気を詠んだ歌、敵を憐れむ歌、銃後の家族の苦しみを詠む歌などが掲載されました。死んだ敵の生き残った家族を憐れむ歌として、例えば、「敵屍」という詞書で、国民新聞の1904年11月17日の5頁では千葉胤明が次の和歌を詠んだ「あだながら/屍となるぞ/あはれなる/親も妻子も/まつらむものを」。明治天皇を讃える和歌または明治天皇への忠実を詠む和歌もあります。例えば、1904年11月23日で、大口鯛二が詠んだ和歌は「御ごころを/やすめまつらで/やまめやは/十年軍の/よしつつくとも」でした。また、このような愛国的な歌をよく投稿したのは、高位の政治家や公家、とりわけ鍋島家や山縣有朋、田中光顕などでした。このような歌人、政治家と国民新聞の緊密で、文学的連携は戦後も続きました。日本神話に触れる和歌もよく掲載されたので、例えば1905年2月26日が御歌所長である高崎正風が「神鳩」という詠んだ和歌は「御軍に/つかふる鳩は/いにしへの/やたのからすの/あとやおふ覺」でした。

また、米国のウィリアム・ハワード・タフト陸軍長官の来日や、1909年の伊藤博文侯爵暗殺など、重要な政局を詠んだものもあります。また、高崎と同じく御歌所のメンバー・遠山英一が1906年に枢密院議員や軍人らとともに満州や朝鮮を巡遊した際にも、一連の和歌が発表されていました。最後の和歌の例として伊藤博文侯爵暗殺を詠んだ和歌を詠みましょう。まず、1909年11月5日に明治天皇の次の御製が漏られました：「くろがねの/的射し人も/あるものを/つらぬきとおせ/大和心を」。明治の有名な政治家であった伊藤は、1909年10月26日の朝、ハルビン駅で朝鮮独立運動家によって射殺されました。当時、日本は韓国を併合中でした。伊藤公爵が日本政府による満州支配を推進するためにハルビンを訪れたのです。伊藤の死は、日本が公式に韓国を併合する口実を与え、5ヶ月後に締結された過程を早めたと、学者は信じています。

佐々木信綱の解説によれば、明治天皇のこの御製は『日本書紀』に登場する、仁徳天皇の時代の公卿、的戸田宿禰禰が、鉄の的を一度で矢で射抜いたというくだりで

す。その的は高麗の外交官から貢物として持ち込まれたものでした。そのため、彼は天皇から非常に賞賛され、新しい名前を与えられました。佐々木信綱は、「どんなに弱く、臆病な者でも、この歌に励まされ、耐え忍んでほしい」という天皇の願いが込められていると述べていますが、この御製が初めて掲載された伊藤の死の政局については明らかにしていません。伊藤の葬儀に近いこと、朝鮮王国からの貢物として『日本書紀』の鉄の的を連想させることから、朝鮮とのつながりから伊藤と立派な貴公子・的戸田宿禰禰を並列させることができ、両天皇のそれぞれの人物への評価は対称的な関係に立っています。この歌はまた、現在の天皇と仁徳天皇との間の連続性を間接的にたどり、途切れることのない皇統という明治時代のイデオロギーの中心的な信条を強調しています。1909年11月4日の葬儀に際し、山縣有朋や田中光顕ら政治家とともに御歌所歌人が「国民新聞」第1面に掲載した挽歌の中で、紙面の都合上、千葉種明の歌のみを引用します。「あたひなき/國の賓を/うしなひし/うらみはつきず/もろこしが原。からやまと/右と左に/になひつる/君をなにとて/神のまもらぬ/。とこしへに/御国もるらん/谷垂の/そこついね/にたまをしづめて」。一首目は、「朝鮮を恨まず」という言葉を通して、明治の政治家、あるいは日本人一般が道徳的に優越し、大らかな立場にあることを描いています。日韓両国の責任を一身に背負った伊藤が神に救われなかったことを嘆きつつ、朝鮮の代役として珍しく歌枕の「唐」を用いた二番目の短歌です。最後の短歌は、谷垂の墓から日本をさらに守ってほしいという伊藤への願いで、ほとんど祈りのように結ばれています。

明治後期の日本において、和歌を活用してナショナル・アイデンティティを高め、ナショナリズムを推進する上で、極めて大きな役割を果たしたのが御歌所という歌人派です。歌会初の開催、新聞への御製と和歌の掲載、重要な出来事への文学的対応など、さまざまな活動を通して、御歌所メンバーは世論形成に貢献し、明治維新の政治的神話らを強化しました。新派からの批判にもかかわらず、御歌所はその地位を維持し、日本の文化的・政治的景観への貢献を通して、国民意識の形成における詩歌の力を浮き彫りにしました。

#### 参考文献：

- Antoni, Klaus. "Political Mythology and the Legitimation of Imperial Power in Modern Japan — the Case of the <<Jinmu-Tenno>> Myth." In: *Power and Speech: Mythology of the Social and the Sacred*, edited by Louise S. Milna, Marcin Lisiecki, and Nataliya Yanchevskaya, 19–28. Torun: Pracownia Wydawnicza Eikon, 2016.
- 長福 香菜 「明治御歌所派歌壇の再検討：鉄幹・子規による批判をめぐって」『広島大学国語国文学会』第201: 17–32, 2009.
- Flood, Christopher. *Political Myth*. New York: Routledge, 2002.
- Hobsbawm, Eric J., ed. *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2006.
- 小泉 夢三『近代短歌史〈明治篇〉』白揚社, 1955.
- 松澤 俊二『「よむ」ことの近代：和歌・短歌の政治学』青弓社, 2014.
- 宮本 誉士『御歌所と国学者』弘文堂, 1974.